

生命のための 水と環境を考える

中部大学教授
武田邦彦氏に聞く

各種メディアで環境問題への発言を続ける中部大学教授で工学博士の武田邦彦氏に、ソーダストリーム社の取り組みについて聞いた。水と環境、ペットボトルのことなど、氏ならではの視点からさまざまな意見を述べてもらった。



写真／北條正明

ただで・くにひこ●1936年生まれ。東京大学を卒業後、旭化成に入社。芝浦工業大学教授、名古屋大学大学院教授を経て中部大学教授に就任し今に至る。『ホンマでっか!?TV』ほか、多くの番組に出演する。著書も多数で、近著は『先入観はウソをつく』(SB新書)。趣味はバイクと音楽鑑賞。

日常的に飲んできた水が
身体に最も適している

コメンテーターとして、テレビで時事問題から社会現象まで縦横無尽に斬りまくる武田邦彦氏だが、そもその専攻は資源学。その資源学の立場から、ソーダストリームについてこう述べた。

「ミネラルウォーターを買って飲むのではなく、日ごろ、飲み慣れた水を炭酸水に変えて楽しむ。これは実にいいことです」

というのも、水は地域によって成分が微妙に異なり、合う、合わないがあるからだという。

なかでも留意したいのは海外のミネラルウォーターで、たとえばヨーロッパと日本の水を比べると、

カルシウム分が多い硬水のヨーロッパ産に対し、総じて日本の水は軟水傾向。飲み慣れない硬水を口にして、お腹を壊すのはいかがなものかと続けた。

そして、それ以上に問題なのは、微量成分の違いだと強調する。

「日本の水には、日本の大地から溶け出した多くの微量な元素が含まれています。そのなかで長年、生活してきたことにより、含有される元素のバランスに即した身体がつくられてきました。このバランスが異なる水を飲み続けられれば、代謝回路などに狂いが生じ、体調を乱すこともあるでしょう」

バランスが異なるだけでなく、含有する微量成分自体に違いのある海外の水は、常飲しすぎないほう

が好ましく、海外で採れた果実も、生育時に吸収した水の微量成分が異なるので、たまに食する程度の方が身体にはいいのだという。

国内においても、地域によって含有する微量成分に差があり、慣れ親しんできた水が一番だとし、

「水道の水もかなり改善されました。私が住んでいる名古屋の水はかなりおいしい。ソーダストリームを使って、水道水で炭酸水をつくってどんどん飲めばいい(笑)」

日本は水資源大国 もって有効に活用しよう

水の活用に関して、武田氏は現状に不満があるという。これも資源学からの意見だ。

「日本は水の資源大国ですが、雨

んでいる。

製品にするために再利用するリサイクルでも石油が使われるので、資源節約の観点からも、ペットボトルの利用を抑えたいと提案するものだ。

ペットボトルのリサイクルについては、武田氏はリサイクルに反対の立場である。

「ペットボトルのリサイクルがはじ



毎年多くの野鳥や海洋哺乳類が、エサと間違えてプラスチック片を飲み込み、無残にも死んでいくという

まる前に机上計算したら、新しいペットボトルを製造するよりも、約3.5倍の石油が消費されるとの数字が導き出されました。ところが実際にスタートしたりリサイクルでは、数値はもっと跳ね上がり、8倍にもなっています」

つまりリサイクルは、資源をさらに消費することもあるとする。

この数字はペットボトルを分別ゴミとして回収する際のトラックの燃料や、そのトラック自体を製造す

るのに必要な石油などを計算に加えたものだという。

「私がリサイクルに反対するのは、分別収集されないペットボトルが増加する点にもあります。一括焼却したほうが、むしろ遺棄されるペットボトルは減るはずですよ」

自然界に放置されたペットボトルは、分解過程でマイクロプラスチック(海洋などの環境中に存在する微小なプラスチック粒子)を発生させ、深刻な環境汚染を招いている。さらに武田氏はいう。

「多くの人が誤解しているようですが、リサイクルでふたたびペットボトルがつかられるわけではありません」

回収された全量のうち、一部がペットボトルになっているにすぎないのだという。

武田氏が指摘するように、分別して出せば、それがそのままペットボトルとして生まれ変わるというわけではない。

もしかして私たちは、ペットボトルのリサイクルというシステムに安住してきたのではないか。リサイクルを免罪符に、ただ便利だからという理由で、ペットボトルを多量に消費してきた。利用済みのペットボトルに対する関心が、いつしか薄れていしまっていないだろうか。

ペットボトルを削減し、環境を守りたい。だからこそソーダストリーム社の提案が新鮮に感じられる。私たちはこれから地球環境とどう向き合っていくべきか。今、それが問われている。



上/地域によって水の成分が異なるので飲みなれた水を使うのがおすすめだ左前/プラスチックが環境を汚す事態が世界中で起きている。プラスチックが自然分解するには450年以上かかることされ、この惨状は今後も続くことになる。遺棄されたゴミから生じるマイクロプラスチックの被害も心配される。左奥/大量消費のツケといえる、湖岸に打ち寄せられた無数のペットボトル。その削減がまさに緊急課題

難しいをばらむ
再利用問題

前ページで紹介したように、ソーダストリーム社は現在、ペットボトルを削減するキャンペーンに取り組

も避けたいところだ。

「結局、貴重な水資源をムダ遣いしていることになり、節水一点張りの認識だけではだめなのです」

地球全体からすると水資源は枯渇の方向に向かい、これから厳しい状況を迎えると武田氏。

「アメリカの地下に眠っていた、河の溶融水もだいが枯れてきてしま

まいました」